



クルターグ：《ピアノのための遊び》より J.S.バッハへのオマージュ

ジェルジ・クルターグの《ピアノのための遊び》は、1973 年から半世紀以上にわたり書き継がれているピアノ曲シリーズ。バルトークの《ミクロコスモス》に倣った教育的な意図のもと、子供の自由な遊びや即興性を音楽の出発点としているため、伝統的な楽譜の読み方にとらわれない図形楽譜や特殊奏法なども多用されている。1 曲が数秒から数分という短い断章（アフォリズム）形式を採用し、特定の人物へのオマージュや個人的なメッセージが込められた楽曲が多く、「J.S.バッハへのオマージュ」もその一つ（「J.S.バッハへのオマージュ」と題された作品は曲集内に複数存在し、「ピアノ連弾によるトランスクリプション」が多いが、ソロ作品もある）。

J.S.バッハ：《平均律クラヴィーア曲集》より

《平均律クラヴィーア曲集》はケーテン時代（1717-23）の作とされ、全ての調性による「前奏曲」と「フーガ」から構成された、全 2 巻 48 曲におよぶ大作。

《第 1 巻》の「第 21 番 変ロ長調」は、速いパッセージやアルペジオ、トッカータ風の華やかな旋律を持つ前奏曲と、三声で構成された明るい主題と 2 つの対位句が組み合わさったフーガからなる。

「第 8 番 変ホ短調」は、荘重な面持ちでゆっくりと歩む前奏曲と、グレゴリオ聖歌を想起させる主題を用いて緩やかに展開する三声のフーガからなる。「第 13 番 嬰ヘ長調」は、12/8 拍子の優雅で牧歌的な雰囲気を持つ二声の前奏曲と、三声で構成されたトリルを含む装飾的な主題にもとづくフーガからなる。

《第 2 巻》の「第 4 番 嬰ハ短調」の前奏曲は、9/8 拍子で書かれた三声のシンフォニア風の楽曲で、哀愁漂う抒情的な旋律が対位的に絡み合う。フーガは 12/16 拍子の三声で、急速な三連符の動きが絶え間なく続き、技巧的かつ力強い推進力を持っている。

ラヴェル：《クーブランの墓》より フーガ

ラヴェルが 1914 年から 17 年にかけて書いた《クーブランの墓》は、第一次世界大戦で戦死した友人たちへの献辞を持つ組曲。18 世紀フランス音楽の伝統を尊重した「前奏曲」「フーガ」「フォルラーヌ」「リゴドン」「メヌエット」「トッカータ」の 6 曲からなる。

その「フーガ」は、厳格な対位法とラヴェル独自の洗練された響きが融合した、静謐で瞑想的な音楽。曲集の中でも特に控え目かつ穏やかで、淡々とした表情を持っているが、三声からなるフーガは本格的で、主題の反行やストレッタなど凝った技法が駆使されている。

J.S.バッハ：「イギリス組曲 第 3 番」「フランス組曲 第 3 番」

「イギリス組曲 第 3 番」は、1715 年から 20 年頃に作曲された全 6 曲からなる組曲の第 3 曲。重厚なプレリュードに始まり、アルマンド、クーラント、サラバンド、ガヴオット I&II（ミュゼット）、ジグの 6 楽章から構成され、特に冒頭の「プレリュード」は協奏曲風の華やかな様式を持ち、単独での演奏機会も多い。

「フランス組曲 第 3 番」は、1722 年から 25 年頃に作曲された全 6 曲からなる組曲の第 3 曲。他の曲集に比べると落ち着きと哀愁を帯びた、内省的な性格が強い。全体は、アルマンド、クーラント、サラバンド、アングレーズ、メヌエット（I&II）、ジグの 6 楽章から構成され、特に 4 曲目の「アングレーズ」は、同組曲の中でも特に有名で、軽快かつリズムミカルな旋律を特徴としている。

J.S.バッハ（ブゾーニ編）：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 2 番 より シャコンヌ

このピアノ独奏用の「シャコンヌ」は、ブゾーニの名を知らしめることに最も寄与している作品と言えよう。原曲において本質を成している弦楽器としてのヴァイオリンの特性を換骨奪胎し、まったく新たなピアノ音楽として成立せしめている。作品の骨格は原曲と同一であるにもかかわらず、ピアノのポテンシャルを極限まで引き出すことで、独自の荘厳さと空間的な広がりをもった世界を現出させ、異次元の輝きを音楽に与えている。